

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：33305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05795・19K20987

研究課題名(和文) 小学校英語教育のための絵本論に基づく絵本の分類と指導モデルの考察

研究課題名(英文) Rethinking picture books for English language education in Japan: Classification of picture books based on picture book theories and teaching models

研究代表者

村松 麻里 (Muramatsu, Mari)

金沢学院大学・教育学部・准教授

研究者番号：10827843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：言語教育教材としての絵本の価値を先行研究等から明らかとしたうえで、絵本論の知見を参照し、「文字の語り」と「絵の語り」に着目しながら英語絵本を3つの類型に分け、日本の小学校英語教育において効果的に活用することのできる絵本の整理・分類を行った。さらに、日本の小学校英語教育現場における絵本活用の実践事例や母語教育及びESLの教室で読み物絵本を言語教育教材として用いる北米の公立小学校の実践事例を視察し、それらを参照しながら、日本の小学校英語教育現場に即した活用の手立てを明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本における絵本研究は幼児教育の読書推進の立場や美術研究の視点からのものが多く、英語教育における絵本活用についても、絵本論の枠組みに着目した先行研究はほぼ存在しなかったため、絵本論に着目した本研究は独創的なものである。絵本論の視点から新たに絵本の整理・分類及び指導法の提言を行ったことは、絵本を用いた教科教育としての授業実践に寄与するものであり、教材選びや教材研究の際の指針となるとともに、より教育的効果の高い指導法を可能にするものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：With reference to the findings of picture book theory, I have divided English picture books into three types, focusing on "story narrative" and "picture narrative". Based on this classification, I organized picture books that can be effectively used in elementary schools in Japan. In addition, through some case studies of public elementary schools in Japan and North America, I clarified possible ways of utilizing English picture books effectively in English language education in Japan.

研究分野：小学校英語教育

キーワード：絵本 絵本論 小学校英語 ホール・ランゲージ

1. 研究開始当初の背景

本研究が開始された当初は、2020年度からの新指導要領全面実施に伴う小学校における外国語(英語)の教科化及び外国語活動の早期化の直前の移行期間にあたり、小学校における外国語教育の在り方が本格的に論じられるとともに、学校現場においては教員からの期待とともに不安や戸惑いなどが聞かれる時期であった。検定教科書の使用開始前であったため、4技能5領域の内、文字や文に関する学習が各社の教科書でどの程度扱われるのかは公表されておらず、読む活動の指導をめぐって様々な推測や提言はなされていながらも実際に新カリキュラムが運用開始された時の児童の反応や教育的成果については未知数であり、読み物教材の在り方や指導法についても試行錯誤の中で望ましいものを確立していくことが求められていた時代である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、項1のような時代背景のなかで、教材としての絵本の価値に着目し、絵本論の知見を活かして英語絵本の整理・分類を行い、指導モデルについて考察することを目的としたものである。教科書を用いて進められる授業では日常生活を想定したやりとりなどの音声中心の言語活動が中心となるが、それらの単元学習内で扱った言語材料に、形を変えて絵本という異なる文脈のなかで再度触れることは、児童にとって楽しく、学習意欲の向上につながると考えられる。さらに、物語の文脈上での言語使用には、言及指示的機能だけでなく、詩的機能や交話的機能などR・ヤコブソンの言語の六機能論等で指摘される様々な機能があらわれるため、英文和訳にとどまらない言語の奥行きや意味世界の広がりにより児童が会うことのできる場としても絵本は有意義な教材になりうる。そこで、本研究では、教科書を用いたボトムアップ型の活動を補うものとして、意味ある文脈の中で児童が自ら類推しながら外国語を学ぶホールランゲージ的なトップダウン型の学習としての絵本を用いた英語学習の在り方を考察するものである。

3. 研究の方法

(1) 絵本論の知見をもとにした絵本の整理・分類

本研究のベースとして用いるのが絵本論という学問領域の知見である。絵本論では、絵本を文字の語りと絵の語りという二つの記号体系からなる複合的メディアとして捉え、互いの語りがある一方の語りが存在することを前提として描かれていることを前提条件としている。すなわち、ここでいう本物の「絵本」とは、「めぐり」によって連結された異なる二つの記号体系がそれぞれに独立した語りを有し、それでいて、絵がなければ成り立たない文と、文がなければ成り立たない絵とが合わさった時にひとつの作品として成立するものである。この視点から絵とことばとの関係性に着目し、絵本分析の手掛かりとして、小学校英語で活用できる可能性のある絵本を分類・整理した。

(2) 指導モデルの考察

上記(1)の分析にもとづいて整理・分類した絵本を、実際に日本の小学校英語教育の枠組み内で活用するための指導モデルについて、文献調査及び、国内外の実践事例の視察を通して考察した。日本のようなEFL環境下での実践事例だけでなく、英語母語話者や移民の児童、読み書きに困難を抱える児童のための母語教育、ESLとしての英語絵本活用の実践事例についても調査し、日本の小学校英語教育において援用できる知見を取り入れ、考察を行った。

4. 研究成果

研究成果としては、以下の通りである。

まず、絵本論の知見に照らした場合、本来の絵本には言語知識の習得のみならず音声面・内容面での遊戯的「体験」や文化的「体験」を児童に与え、そして、言語の働きや構造に対する気づきをひきだす潜在的な力があることが明らかとなった。日本の英語教育で使用される英語絵本を、想定される読者の属性によって分類すると、外国語学習者向けに作成された教材絵本(ELT絵本)、英語母語話者向けに作成された教材絵本(reading schemes)、オーセンティックな絵本(real books)となるが、これらを絵本論の知見に照らしてテキスト分析すると、では読者に言語の正しさを絵で「確認する」読みをもたらし傾向にある一方、言語教育を目的としないでは読者の社会文化的知識や物語のコンテキストからの判断力・推察力を前提として複雑な表現や抽象性の高い表現を多く用いる傾向があり、言及指示内容のみならずその奥にこめられた意味までを「読み解く」「想像・創造する」読みをひきだす傾向にあり、特に現代絵本と称される創作絵本の作品群ではその傾向が強いことが分かった。

次に日本の小学校外国語教育の現場での絵本を用いた指導法については、このように教材としての各絵本の特性を理解したうえで、授業者が目的に応じて絵本を使い分けて使用することが重要であることが示唆された。例えば、文字なし絵本のように絵の語りだけで成立する類型の絵本は文字を話の筋を類推しやすく読後の達成感も得られやすいためセルフ

リーディングにも適しており、読む力の未熟な学習者にとって受け入れやすい傾向にある。あるいは、絵が語らない文主導の作品で文に挿絵として説明的な絵が添えられた種類の絵本では、読み手が類推したり創造的な読み方をしたりする余地はないが、文が単元で学んだ既習の語彙・表現で構成されていた場合には、物語を通して言語知識の復習ができるという点で有用な読み物となり得る。

さらに、読むときのスタイル(ストーリーテリング、セルフリーディング、グループリーディング、ガイデッドリーディング等)や児童への声掛け、発問、発展学習、他教科連携の有無やその内容等、様々な要因によって授業構成と学びの質が変わってくる。

以上のように、小学校英語教育において絵本を用いる際には、絵本論等の視点を持って教材選択を行い、児童に身に付けさせたい力、使用目的に応じて活動を組み立てていくことが重要である。本助成事業の研究の枠内では、実証研究まで至らなかったが、現行の学習指導要領のカリキュラムとの関連において教育的効果のより高い絵本活用の活動を策定し、実証研究を深めていくことを今後の課題としたい。

<参考文献>

Jacobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In Sebeok, T. A. (ed.), *Style in language*. (pp. 350-377). MIT Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 村松麻里	4. 巻 4
2. 論文標題 小学校外国語の文字学習における現代絵本の活用：第二言語習得の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢学院大学教職センター 紀要	6. 最初と最後の頁 277-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村松麻里	4. 巻 2
2. 論文標題 「新時代の言語教育」を考える 多様な言語観から見る英語教育の課題と小中高接続の在り方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本学校教育学会年報	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村松麻里	4. 巻 4
2. 論文標題 小学校の言語教育における読み物の活用に関する一考察：アメリカの公立小学校の母語教育を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 未来を拓く教育実践学研究：共創型対話学習研究所機関誌（論文集）	6. 最初と最後の頁 48-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多田孝志、南雲まき、村松麻里、竹澤賢樹	4. 巻 3
2. 論文標題 共生の教育実践学の考察：「負の国際化」の克服を視点として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢学院大学教職センター 紀要	6. 最初と最後の頁 114-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村松麻里	4. 巻 第2号
2. 論文標題 小学校外国語における文脈のある学び： We Can! を用いた授業に本物の絵本を取り入れる試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『金沢学院大学教職センター紀要』金沢学院大学	6. 最初と最後の頁 119-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村松麻里
2. 発表標題 アメリカ初等教育におけるリーディング授業の多様性 Guided readingを中心に
3. 学会等名 アメリカ教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村松麻里
2. 発表標題 カリフォルニア州の公立小学校における母語としての英語教育
3. 学会等名 第49回中部地区英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村松麻里
2. 発表標題 アメリカ公立小学校の言語教育 他者性・自主性が生きる多様なカリキュラムに着目して
3. 学会等名 日本学校教育学会第34回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村松麻里
2. 発表標題 アメリカ初等教育におけるリーディング授業の多様性 Guided readingを中心に
3. 学会等名 アメリカ教育学会第31回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村松麻里
2. 発表標題 英語教育における「あそび」についての一考察 絵本と歌あそびを中心に
3. 学会等名 日本個性化教育学会第14回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 多田孝志・米澤利明、村松麻里他、計17名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北國新聞社	5. 総ページ数 294 (分担執筆86-101)
3. 書名 新時代の教職入門：共創型対話学習で次世代の教師はこうして養成する！	

1. 著者名 綾部保志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 300 (分担執筆：140-153)
3. 書名 小学校英語への専門的アプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------